

ライバル

六月十一日、オークアリーナでバスケットボール呉賀茂地区大会が行われていた。和佳かずよしのチームは準決勝で敗退したものの、三位決定戦で勝てば、県選手権への出場が決まる大切な試合だった。

「メンバーチェンジ！」

同点から、シュートを決められ五十八対五十六、残り十五秒のところ監督は和佳に代えて雄一をコートへ送り出した。和佳と雄一は一年生の時からレギュラー争いをずっと続けてきたライバルだ。パスやドリブルでは、和佳の方がうまいがシュートに関しては、雄一はチーム一の成功率を誇る。

監督は雄一のシュートに逆転をかけたのだ。

「絶対にあきらめるなよ。あと十五秒ある。必ずシュートまで持ち込むんだ。悔いを絶対に残すな！」

残り十五秒……。ボールがコートに入り、センターからスリーポイントラインの外で待っていた雄一へパスが出た。残り五秒……。

「四・三・二……。」「

「雄一、打つんだ!!!」

「ゴール!」



会場からは割れんばかりの歓声と拍手が湧き起こった。大逆転だ。こうして和佳のバスケットボール部は、県選手権大会への出場権をつかんだ。

以来、雄一はチームメイトからだけでなく、監督からも目をかけられているのは誰の目にも明らかだった。一方で和佳は、練習試合でもレギュラーから、準レギュラーの扱いを受けるようになり、それまで親友だった二人の間に、微妙な亀裂きれつが生じ始めた。

期末試験も終わり、県大会に向けてチームはより熟さを増していた。練習が終わり、和佳はいつものように響子と帰っていた。

「カズくん、テスト全部返ってきた？」

「今日で九教科そろったよ。オレ平均七十八点だった。」

「ああ、カズくんも雄一くんもうらやましいな。私なんか平均五十五点。受験生だし、もっとがんばらなくっちゃ。」

「響子、雄一の平均点知ってるのか？」

「うん、八十点って言っていたよ。」

（くそっ、また、負けたか。勉強じゃ、やっぱり勝てないな……。）」

「そう言えばこの前の試合、響子も見ただろう。雄一には、おいしいところを持ってかれたよな……。あの時、雄一と交代してなかったら、おれが試合を決めたかもしれないのに……。」「

「カズくん、何言ってるの。あのとき雄一くんのスリーポイントが決まっていなかったら、

県大会への出場はなかったんだよ。あのスリーポイント、かつこよかった！」
「おい、響子……。」
和佳は、心の中に嫉妬心が沸き立つのを抑えることができなかった。

県大会まで残り一か月となった。和佳は、レギュラーの座をとりもどすべく、雄一に対して敵対心をむき出しにして練習するようになった。それはチーム全体にはむしろいい影響を与え、チーム全体がレギュラーの座をかけ、熱心に練習に取り組むようになっていった。

そんな中、練習のミニゲームで事件は起きた。パスされたボールを取り合い、和佳と雄一は重なり合って倒れ込んだ。和佳はなんともなかったが、雄一は左足を押さえて、激痛を訴えた。結局、雄一は左足の複雑骨折で全治一か月の診断を受け入院した。

病院のベットでふさぎこんでいる雄一に、見舞いに訪れた和佳は、自分でも思ってもいなかった言葉を口にしていった。

「わざとじゃないから……。」

雄一は驚いたようにして目を見開いて和佳を見た。それから笑ってこう言った。

「そんなことは分かっているさ。ただ、こうなった以上、おれの代わりに、毎日シュートを百本練習しろよ。運動神経ではかなわないお前に勝つために、俺は、ずっとこの一年間それを続けてきたんだからな。」

和佳は、黙ってうなずき病室を後にした。ドアの向こうから雄一のすすり泣く声がいつまでも耳に残った。

(おれってやつは……。)

それから和佳は、雄一が教えてくれた秘密の練習場所に毎晩通ってロングシュートの練習を続けた。



県選手権大会当日、ようやくギブスがとれたばかりの雄一を監督はベンチ入りさせた。一回戦の相手は名だたる強豪チームだったが、雄一の分もがんばろうというチームメートの熱い思いがチームの士気を高め、予想外の善戦を展開していた。和佳は得意のドリブルシュートを決め、五六対五五の一点差に追いついた。残り二〇秒となったところで、相手チームのファウルによりフリースローのチャンスがまわってきた。その時、監督が突然タイムを取った。

監督は雄一と和佳を呼ぶと、

「あと二十秒、どちらがコートに立つか、二人で決めろ。」と告げた。

